



TITLE:

<学会報告> ティリッヒのキリスト論

AUTHOR(S):

高橋, 良一

CITATION:

高橋, 良一. <学会報告> ティリッヒのキリスト論. ティリッヒ研究 2003, 7: 55-61

ISSUE DATE:

2003-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/57618>

RIGHT:

ティリッヒ研究 現代キリスト教思想研究会

第7号 2003年9月 55~60頁

学会報告

ティリッヒのキリスト論 カッセル講演を中心に

高橋 良一

はじめに

キリスト教は「ナザレのイエスがキリストである」ことを信仰の核心とする宗教であり、その意味でキリスト論がキリスト教神学の根本に位置する主題であることは言うまでもない。その点は、ティリッヒにおいても同様である。

ティリッヒのキリスト論は『組織神学』第二巻(Tillich[1957a])において一つの結実を見るのであるが、その原型は1911年の『キリスト教の確実性と史的イエス』(Tillich[1911])と題されたカッセル講演における128の命題においてすでに見出される。本発表では、ティリッヒのキリスト論が、その初期の段階においてどのようなものであったのかを検討し、それが後のキリスト論においてどのように展開されているのかを明らかにしていきたい。

1. 当時の問題状況

まずは、ティリッヒがカッセル講演の段階において、どのような問題意識を持っていたかを確認しておこう。ティリッヒは『境界に立って』(Tillich[1936])という自伝的回想の中で、当時の自

らの問題意識を次のように振り返っている。

「私の思想展開にとって決定的な証書(authoritative proof)は、1911年の聖霊降臨節に、親しい神学者たちの集まりで私が発表した諸命題である。この中で私は、史的イエスが存在しないということが歴史学的に確からしいということになったなら、キリスト教の教理はどのように理解されるべきなのか、という問いを提起し、これに答えようとした。」(Tillich [1936],p.33)

史実としてのイエスの存在そのものまでもが徹底的な懐疑にさらされる中で、キリスト教信仰の確実性はいかに基礎づけられるべきであるのか。歴史主義によって突きつけられたこのような問題を、ティリッヒは後々まで抱き続けることになる。事実、ティリッヒは『組織神学』第二巻(Tillich[1957a])の中で、あらためて同じ問いを発している。

「キリスト教信仰の原典資料(source documents)の扱いに歴史的方法を採用することは、教会並びに信徒個人の思想と生活に危険な不安定さをもたらすことにはならないだろうか。歴史的研究は聖書の記録についての完全な懐疑につながりはしないだろうか。歴史的批判はナザレのイエスなる人物が生存しなかったという判断に至るということは考えられないだろうか。[中略]もしイエスが存在しなかったということが、たとえ蓋然性がわずかであっても、とにかくありうるとされるならば、それはキリスト教信仰にとって破壊的なことではないだろうか。」(Tillich[1957a],p.113)

2. カッセル講演におけるキリスト論

こうしたティリッヒの問題意識の背景には、イエスの歴史性をめぐる当時の神学の状況がある。キリスト教は「イエスがキリストである」ことを信仰の核心とする宗教であるが、そこにおいてイエスがキリストであると告白される場合、ナザレのイエスという過去に実在した一人の人間、歴史上の一人物がキリストであると告白されている。したがって、キリスト教信仰の成立にはイエスという歴史上の人物の存在が根本的にかかわっているものであり、その意味で、キリスト教信仰とその宣教は史実としてのイエスの存在を基本的前提に含んでいることになる。

しかしながら、19世紀以降の歴史的研究が突きつけたものは、イエスその人へとさかのぼる試みがきわめて困難なものであるということであった。歴史的思惟はキリスト教の啓示の出来事をもはや超自然的で超歴史的なものとは認めず、歴史的な出来事として探求しようとした。聖書は靈感によって書かれた誤謬なき書物として、まったき権威をもって解釈されるのではなく、人間によって書かれた一つの宗教的文書であり、他の人間的な文書と同様に読まれ、解釈されうるものとされた。こうして、歴史的方法による探求は、歴史的事実としてのキリストの出来事についてのわれわれの認識が蓋然的なものに過ぎないことを明らかにした。いったい、キリスト教信仰の基礎をなすキリストの出来事が蓋然的なものに過ぎないならば、信仰の確実性はいかにして保証されうるのか。キリスト教はその信仰の根拠をどこに見出すべきなのか。こうした問題意識は当時広く共有されていたものであり、ティリッヒのキリスト論もこのような問題意識の元に形成されていったのである。

さて、こうした歴史的研究によって突きつけられた問いに対するティリッヒの答えは次のような言葉に集約されている。すなわち「キリスト教信仰の基礎は史的イエスではなく、キリストの聖書的形象(picture)である」(Tillich[1936],p.34)。もっとも、ティリッヒがここで「聖書的形象」ということで語ろうとする内容は1911年のキリスト論において十分に展開されているとはいいたい。むしろそれは『組織神学』第二巻にいたって、「形象の類比(analogia imaginis)」として明確に論じられる事柄である(Tillich[1957a],pp.115f)。カッセル講演における『キリスト教の確実性と史的イエス』という表題に示されるように、1911年当時におけるティリッヒの問題意識は、キリスト教信仰の確実性はいかに基礎づけられるのかという点に集中している。以下、1911年のキリスト論の内容を概観しよう(Tillich [1911],pp.31-46)。

ティリッヒは、まず、「イエスはキリストである」というキリスト教の信仰命題と、「キリストであるイエスが存在していた」という歴史的な判断とを区別する(命題1)。前者の信仰命題が「イエス」と「キリスト」を結びつける命題であるのに対して、後者の歴史的判断は「イエスがキリストである」ことを前提とし、その前提を歴史的現実と見なす命題である。そこで、「イエスはキリストである」という命題の確証はイエスの探求によって歴史的に試みられるのか、それともキリストの探求によって教義学的に試みられるかということが問題になる。ティリッヒはこのように問題を整理した上で、歴史的な確証と教義学的な確証をそれぞれに批判していく。先取りして言うと、ティリッヒはそのどちらもが確証としては不十分であ

ると考えている。まず歴史的方法においては、現存する史料の少なさに加えて、当時の報告の信頼性、伝承過程における誤謬や改竄、さらには聖書記者の観察が詩的、神話的な観察と分かちがたく結びついていることなど、およそ不確実な要素が多く含まれていることをティリッヒは指摘する。このようにしてみると、より高い蓋然性を求めて史料から史実を探究していく歴史的方法の成果も結局のところは蓋然的なものに過ぎず、そこではイエスそのものに立ち返ることはもとより、イエスが実在していたということまでもが懷疑にさらされることになる。ティリッヒはこうした点をふまえて、歴史的方法によっては史的イエスについての確証には到達できないと結論づける（命題 28）。したがって当然ながら、歴史的方法によってキリスト教信仰の確実性を基礎づけることはできないのである。

これに対し、教義学的方法においては、「イエスがキリストである」ことはすでに暗黙の前提とされており、そのこと自体は問題とはならない。ここでは聖書の権威や聖霊の働きがイエス像の歴史的正しさを保証することになる。しかしながら、こうした権威や靈感からの論証は、それ自体「イエスがキリストである」ことを前提としている以上、循環論法になる。同じように、キリストの概念から演繹的に論証することも循環論法となっている。したがって、イエスがキリストであることを教義学的方法によって確証する試みは、論証としては不十分なものとならざるをえない（命題 29-36）。

ティリッヒはさらに、福音のイエス像の作用やキリストのわざといった教義学的な主題に批判を加え、それぞれの問題点を論じていく。そして、こうした議論ののちにティリッヒは認識論的な問

題へと論を進める。すなわち、キリスト教の確実性はいかにして基礎づけられるかという問題を、確実性とはそもそも何であるのかという問題として考察するのである。ティリッヒによれば、確実性の問題の批判的探求とは、根本において、認識論的原理を提示することであり、そして、その原理は真理の思惟そのものから取り出されるものでなければならない（命題 82-83）。確実性の根拠を求めていくのではなく、そもそも確実性とはいかなる事柄であるのかということを根本的に探求しなければならないのである。こうした立場から、ティリッヒは、「同一性（Identität）」というドイツ観念論的な原理を確実性の原理として位置づける。ティリッヒによれば、この同一性の原理には、真理の統一性ということと、認識行為における主観と客観の同一性ということが含意されている（命題 84）。そして、この同一性の原理に基づいて、ティリッヒは教義学的な命題を再検討していくのである（命題 102-）。

このように、ティリッヒのキリスト論において、確実性の問題は、認識行為における主観と客観の同一性の問題として考察されていることが明らかになった。この「同一性」をどのように理解するかということはそれ自体大きな問題であるが、さしあたりここでは、ティリッヒが確実性を主観的領域や客観的領域に還元されるものではなく、主観と客観の結びつきにおいて成立する事柄として考えていることを指摘しておきたい。すなわち、確実性の問題を単なる主観に還元することも、客観的な事実命題の領域に還元することも不可能であると考えているのである。

3. 啓示の出来事における「同一性」

ティリッヒはこのように、確実性の問題を「同一性の原理」のもとに考えるのであるが、それは後のティリッヒの啓示理解にも結びついている。すなわち、ティリッヒは啓示の出来事を、神秘の顕現と、それを受容するわれわれ人間との結びつきにおいて捉えるのである。

ティリッヒによれば、啓示とは「通常の意味連関を超えたものが通常の意味連関内において顕現すること」であり(Tillich[1951],p.109)、通常の意味連関をこえた神秘が具体的な経験として受容されるところに啓示は生起する。しかし、啓示はわれわれに無関係な出来事として投げ込まれるわけではない。「われわれにとって究極的関心の事柄であるところの神秘だけが啓示において現れる」(ibid.,p.110)のであり、啓示は信仰と結びついたものの、あるいは信仰を引き起こすものとして生起するものでなければならない。つまり「啓示は、それを自己の究極的関心として受容する人がなければ存在しない」(ibid.,p.111)のである。ティリッヒはこのように、神秘の顕現としての啓示は信仰と不可分に結びついた具体的な出来事として、主観・客観の両面において生じる出来事であるとする。

こうした啓示理解は「キリストとしてのイエス(Jesus as the Christ)」というティリッヒの表現にも表れている。「キリストとしてのイエスの出来事」とは「ナザレのイエス」という歴史上実在した人物の事実性と「イエスをキリストとして認める」という信仰における受容とが不可分に結びついたところで構成される出来事である(Tillich[1957a], p.97)。ここで、この、事実と受容の一致における出来事としての啓示理解が、前節で述べた「同一性の原理」から考えられていることは明

らかであろう。ティリッヒの言葉を借りるまでもないが、「イエスがキリストであるとの主張が維持されるところに、キリスト教の使信がある」(Tillich[1957a],p.97)のであり、キリスト教が生じたのはイエスの弟子の一人がイエスに向かって「汝はキリストである」と言わしめられた瞬間においてであった(ibid.)。キリスト教信仰は、イエスをキリストとして受容するところに成立しているのである。

4. 信仰の確実性

キリスト教信仰がこのような事実と受容が不可分に結びついた出来事において成立しているならば、すでに見たように、イエスのみ、あるいはキリストのみから信仰を基礎づける試みが不成功に終わるのは必然である。こうした主張は後のティリッヒにおいても一貫している。『組織神学』第二巻においてもティリッヒは次のように「史的イエス」の問題に論及する。

まず、聖書におけるナザレのイエスについての報告は、イエスをキリストとして受容した人々によるキリストとしてのイエスについての報告であるのだから、イエスの人格や生涯の具体的事実を抽出するためには、出来事の事實的側面を受容的側面から批判的に分離することが必要となる。歴史的批判的研究はこのようにして史的イエス像を再構成しようとするのであるが、そもそも歴史的事実を純粹客觀的に取り出すことは困難である。さらにまた、こうして構成された史的イエスの形象そのものが結局のところ、多かれ少なかれ蓋然的であるにすぎない。もし信仰がこのような歴史研究によって基礎づけられなければならないとしたら、信仰の確実性もまた蓋然的なものにとどま

らざるをえない。しかし、ティリッヒは、歴史的研究によってキリスト教信仰を基礎づけることは不可能であるだけでなく、このような蓋然的な事柄は信仰の受容の根拠にも否定の根拠にもなりえないという(Tillich[1957a], pp.102-103)。(1)

そこで、それでは信仰はいかにして基礎づけられるのかということが改めて問題となる。すでに見たように、初期のキリスト論では、認識行為における主観と客観の「同一性」において確実性の問題が論じられていた。この「同一性」の原理とは、真理の思惟そのものから取り出される原理であった。すなわち、確実性とは外的な根拠や証拠を求めることでは明らかにならず、確実性そのものを根本的に考察しなければならないというのである。

このことは、信仰の確実性が信仰そのもののうちに見いだされなければならないことを意味している。すでに初期のキリスト論において明らかにされていたように、信仰とは歴史的研究による蓋然的な根拠や、外的な権威によって基礎づけられるものではない。信仰は自律的な理性や他律的な権威によって保証されるものではなく、信仰それ自身のうちにその確実性の根拠を持つものでなければならない。ティリッヒは、信仰の確実性は認識や判断における蓋然性の問題ではなく、究極的なものに捉えられるという経験のなかで、われわれを捉える實在の究極性によって保証される直接的な確かさであると述べる。すなわち、実存的疎外を克服して信仰を可能ならしめる「新しい存在」の出現によって、信仰は直接的な確実性を保証されるのである(Tillich[1957a], p.114)。この新しい存在とは「実存の諸制約下における本質的存在、本質と実存との分裂が克服されている存在」(Tillich[1957a], p.118)であり、それはすなわち、

実存的疎外の状況における古い存在を克服する人間の存在の新しいあり方を意味する。ここで言うところの存在の「新しさ」が、単に時間的な前後関係としての新しさを意味するのではない。すでに述べたように、啓示の出来事とは「通常の意味連関を超えたもの」が「通常の意味連関内」において顕現することであり、このとき啓示される「通常の意味連関を超えたもの」とはわれわれの主体的な把握を拒み、われわれの実存を揺さぶり、変革する神秘として、常に「新しい」ものである。このような意味における「新しい」存在は、われわれの歴史的具体的状況のなかに現れ、われわれの存在を決定的に変革するものでなければならない。こうした決定的な出来事において、われわれを捉える實在の究極性によって保証される直接的な確かさとして、信仰の確実性は考えられているのである。

む す び

カッセル講演の段階において、ティリッヒの問題関心の中心にあったのは、キリスト教信仰はいかにして基礎づけられるのかということであった。そこでの議論は、確実性そのものの問題へと展開されたのであり、主観・客観の同一性における直接的な確かさが信仰の確実性を考える上での鍵となっていた。確実性のこうしたとらえ方は後のティリッヒにおいても、認識以前の直接的な「気づき(awareness)」として、一貫して認められるものであり、ここにティリッヒの試作の連続性が認められる。しかしながら、カッセル講演においては十分に論じられなかった問題もある。それは、キリストとしてのイエスの出来事がいかにして現在のわれわれと結びつくのかという問題である。

こうした問題は『組織神学』第二巻において「形象の類比(analogia imaginis)」として論じられる事柄である。ここで詳しく論じることはいないが、ティリッヒによれば、聖書において証言されたキリストとしてのイエスの「形象」が、キリストの出来事において決定的に現れた存在の力を媒介し、われわれの信仰を創造すると考えられている。これはキリスト論とキリスト像の結びつきを考える上でも示唆的であるが、この問題については稿をあらためて論じたい。

註

- (1) ティリッヒはここで歴史的批判的研究そのものの意義を否定しようとしているのではない。ティリッヒは「歴史的批判はキリスト論的諸象徴の発展の理解に大いに寄与する」(Tillich[1957a], p.112)と考え、歴史的批判的研究は信仰と神学を迷信と不条理から守るという点で、むしろ積極的に評価している(*ibid.*)。要するに、歴史的批判的研究は結果として、信仰が蓋然的な根拠のもとに基礎づけられるものではないことを示しているのである。

(たかはし・りょういち 関西学院大学講師)